モノグラフ

穴があくほどものを見る

上羽 陽子（うえば ようこ）
本館文化資源研究センター

（写真1）タテ48cm×ヨコ37cmの袋

ここに一枚の袋がある。これは、インド西部のグジャラート州アフマダーバードの骨董品屋で購入した袋である（写真1）。これを購入した五年前、店主からの説明はグジャラート州西部のカッチ県に住むラバーリーの女性が、婚礼用の衣装や道具を入れて運ぶ袋「コトリィ」との説明を受けた。フムフムなるほどと、納得をしながら何年間は我が家のタンスで眠っていた。

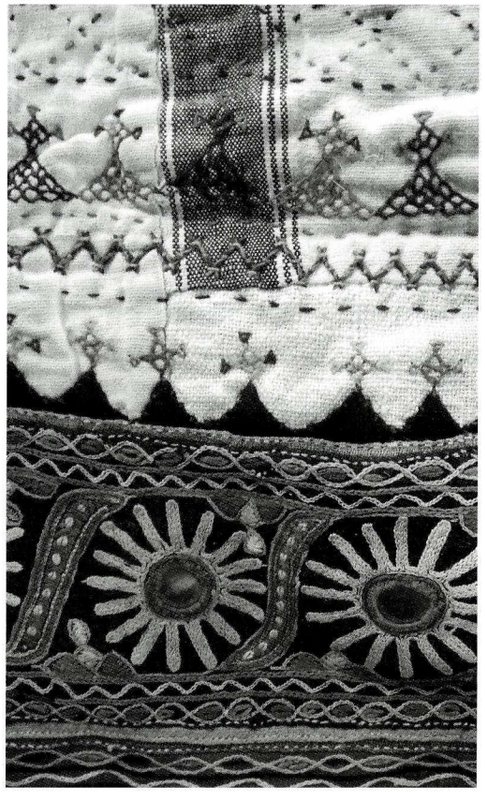
先日、久しぶりにこの袋を手に取る機会があり、以前、説明を受けた婚礼用袋という目線でこの袋を見ると、何か不自然なことに気がついた。通常、ラバーリーの人びとは婚礼用に使用するものには、使い古した布を使用することはめったになく、新しい布を用いて制作をする。じっくりこの袋を見てみると、袋の上半分に用いられている布は、着古した男性の下衣を使用している。男性の下衣に用いられる木綿布にはボーダー部分に縞模様が織り込まれており、この袋の中央のタテ縞は、まさに下衣のボーダー部分を再利用して作られたことがよくわかる（写真2）。

（写真2）男性の下衣。ボーダー部分に縞模様が織り込まれている

また、この袋を裏返してみると、使われている下衣の布には、何度も何度も、継ぎ接ぎをした部分がある。きっと、一枚の布を大切に使うために、穴があいたら繕い、そしてまた穴があいたら繕うということが繰り返され、少しずつ異なった木綿布が何枚にも合わさっているのである（写真3）。さらに、袋には泥のような汚れもついており、明らかに儀礼でしか使われていない他の婚礼用袋とは異なっている。

きっと、この袋は婚礼用ではない。こんな、当たり前のことに何故、長いあいだ気がつかなかったのであろうか？わたしは一九九七年からカッチ県のラバーリーを調査対象として、彼らの刺繍布は見慣れてきたはずである。骨董品屋の店主があまりにも饒舌であったことを差し引いても、わたしは彼らのものを見慣れすぎていて、ものをそのまま素直に見ることができていなかったのではないか。

改めて、わたしはこの袋がどうやって作られ、どのように使われるのかといったことを確認するために、この袋を片手にカッチ県を訪れた。カッチ県で生活をするラバーリーはラクダやヒツジ、ヤギなどの牧畜をおこなう人びとや、牧畜生活から離れてサービス業やトラックの運転手、アラブ諸国への出稼ぎなどで生計を立てている人もいる。牧畜生活から離れている人びとに、この袋のことを尋ねると、「婚礼用の袋」という返答がやはり多かった。



（写真3）袋の拡大。異なった木綿布で継ぎ接ぎが施されている

しかし、牧畜生活をしている人たちは、これは「ガラヌコトリィだ！」と口をそろえて答えた。この袋は、放牧中の晩に子ヒツジや子ヤギが逃げないようにつなげておく首輪・ガラヌを入れるための専門の袋であるという（写真4）。予想どおり、この袋は婚礼用ではなく、放牧用の袋であった。だが、同じような放牧用袋がたくさんあるなかで何故、この袋が首輪入れ専門の袋とわかるのであろうか。首を傾げているわたしを見て、彼らはタテヨコの袋の比率と使われている布の種類、施されている刺繍でわかる、そして、それをおまえが判断するにはもっともっとたくさんのものを見なければダメだという。

現在の牧畜生活で使われている同様の袋は、わずかな刺子のみの簡素なものとなっている（写真5）。改めて、この袋を見てみると、首輪を入れる袋にここまでの細かい刺繍を丁寧に施した人の手の動きまでを想像することはできても、彼らの言う微妙な差異を理解することはできなかった。

当然、ものを見るにはそのものが作られた社会や文化への理解が必要となる。しかし、ときには先入観をもたずに、素直にものと出合って、素直に感じ取ることも大切なことである。

ものときちんと向き合って、ものが語っていることを聞き取る。そして、もの全体を見てから細部を見る、そしてまた全体を見る。この一見、当たり前で愚鈍のような行為を繰り返すことによって、あらたな発見がある。昨年、民博にインド西部の刺繍布約三五〇点があらたに収蔵品として加えられた。これらの刺繍布を穴があくほど見てみたい。

（写真4）子ヒツジに首輪をかけるラバーリーの男性

（写真5）現在使われている放牧用袋。
使い古された布を巧みに再利用して作られている